



箕輪奇談

卷之貳

^ 13  
3383  
2





13  
3383  
2



茶儀

名去物 詠卷の式

月報

大正十年八月廿九日  
本大學出版部贈

- お市おけい 懐海の事
- 名去物 大郎の事
- お吉の一言 切しあふ事



































播磨とち〜  
高砂大船〜  
下通〜  
あま〜  
か〜  
八〜

あ〜  
ち〜  
た〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜















りて又五州の斯處へ身みの  
竹たけ翁おきな故ゆかりひと物もの竹たけと辨わかつる孫まご  
しる事こと百もも燈ともしびの如ごとく又と新あらたく  
若わか者もの為なす所ところの程ほどありとりて海うみ  
神かみ靈たま返かへるゝと始はじむと世よに  
心こころ移うつひあはると益えきひあはると  
有ありて僧そう侶りよの身み知しる人ひとと  
あゝ

おまのケ一言いっごん何なにとある事こと

あゝも身み大おほ人ひと神かみと  
事ことを思おもひひあはると身み知しる人ひとと  
んゝかひゝと  
けあゝおまのケと  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ











さしき事ありて自心が新  
猶もあましく或は侍を或は  
疑ひつゝ詔をいふおは是と  
笑ふにや行を思ひ居候も  
あれ侍を事あると又と誠  
何と事ありとと報ひら  
後と一を物ありひらと契  
七師の縁海と一おはの愛想

はらうとましとのものあらと  
おまのがましとあまが  
とあひつゝ事合を  
おはをこの事ありて  
しあつゝあつゝあつゝ  
唯れつゝあつゝあつゝ  
あつゝあつゝあつゝ  
あつゝあつゝあつゝ  
あつゝあつゝあつゝ  
あつゝあつゝあつゝ































